

新たな枠組みのデザインと実験

アート NPO から、地域の文化施設、経済団体や行政、数々のまちづくり活動団体まで、さまざまな主体とネットワークが地域をベースに有機的にうごめき、試行錯誤を繰り返しながらも少しずつ成長し始めているさまを、一年前の同年鑑で 2005 年の「地域文化」の動向として紹介した。あわせて、そうした動きを支えるコミュニケーションデザインのあり方や、新たな公共の枠組みが求められていることにも言及してきた。

2006 年は、まさに各主体の連携による実践の枠組みが意識的にデザインされ、新たな公共のシステムとして地域での実験が始められる、そんな段階に差し掛かってきたことを如実に物語る出来事の数々が現れた 1 年であった。地域との関係の中に文化を位置づけ展開していく志向性、文化の蓄積の中に地域の未来像を見出していく志向性、その両者が重なり合い、地域と生活・文化の応答関係がいつそう明確に認識され、大きな流れとして定着してきている。各地で「まち歩き」という営みに、強い関心が寄せられてきていることにも、こうした現象の一端を捉えることができる。

地域の博物館と市民の力

地域と文化をめぐる画期の到来を決定的に印象づけたのが、2006 年 4 月下旬から 6 月上旬にかけて吹田市立博物館で開催された「千里ニュータウン展 ひと・まち・くらし」であった。公募の市民委員 44 人が主体的に企画・運営を担い、まさに市民がつくる特別展、市民委員と博物館学芸員による協働作業が成果を上げた。わずか 1 カ月半の会期で、前年度の全入館者数 1 万 7 千人をはるかに上回る 2 万 2 千 1 百 70 人の入場者を記録し大きな注目を集めたのである。この成果は、多くの公共博物館が各地で集客に苦しみ厳しい運営状況に置かれている中で、改めて地域博物館が市民に必要とされている存在であり、市民によって支えられる存在であることを、示してみせた事例でもあった。

1962 年の千里ニュータウンまちびらきから現在まで、里山が切り開かれ生態系も一変しながら、新たな緑に包まれた計画都市が生まれ育っていく様子、そのまちに移り住んできた人々の生活の一こま一こまが新たなまちの歴史をつくってきた様子。市民自らで集めた懐かしい生活用品や映像資料等々で構成されたメイン会場、40 年前の暮らしを団地住棟内に再現したサテライト会場ともに、会期中絶えることない来場者で賑わった。まちに生きるということ・生きてきたということの意味、まちと暮らしの尊厳を実感する装置として、人と人、人とまちとの繋がりを確かめ合う装置として、博物館の果たし得る役割を問いかける出来事であった。

アートによるエンパワーメント

夏の真っ盛り 2006 年 7 月下旬から 8 月上旬にかけて、大阪のディープサウスエリア

とも称される大阪市浪速区の新世界地域及び日本橋電気街を舞台に開催された、地域密着型のアートフェスティバル「ビッグ盆！」もまた新たな協働の境地を切り開いて見せた真摯にして痛快な文化的出来事であった。

破綻した大阪市の土地信託事業、新世界につくられた都市型遊園地「フェスティバルゲート」内に活動拠点を置く、「ダンスボックス」をはじめ4つのアートNPOが周辺地域との繋がりを築きながら実現した、いわば地域の夏祭りの創造的再生である。目玉のひとつが、「ビッグ盆！」という名にもうかがえる、42年ぶりともいわれる盆踊りの復活。地域住民の協力で、50年前に制作された「新世界新地小唄」のレコードを探し出し、地域住民の記憶の断片と若いアーティストのコラボレーションで新たな振り付けを考案したもの。ほかに、新世界のまちを映像で切り取る「remoscope_workshop in 新世界」や、アーティストによる電気楽器・作品展「テクノポリタンミュージアム」、就労支援活動の一環でもある「ニートでアートカフェcocoroom in 日本橋」などが繰り広げられた。地域に沈殿し埋もれている文化的資源を掘り起こし、エンパワーメントしていく、触媒としてのアートNPOの存在価値が発揮された好例といえるだろう。

また、フェスティバルゲートに拠点を置くNPOのひとつ「こえとことばとこころの部屋」は、ニートやホームレスの人々をはじめとする、ぬきさしならぬ社会問題にアートを介して向き合う営みも重ねている。就労支援カフェの開設や、近接する日雇い労働者のまちを拠点に紙芝居劇やまち案内を行う高齢者グループ「むすび」の活動支援を実践している。社会的排除を克服し社会的包摂へ、ソーシャル・インクルージョンの理念の具現化がアートNPOによって模索され始めている。

創造力の源としてのまち

公募型・支援型の文化施策の枠組みを活用した取り組みの中にも、優れた事例が生まれてきている。例えば小粒ながら心に残ったものに、「大阪楽座事業」（大阪府文化振興基金を原資に、歴史的建造物を保存・活用し文化活動の場の拡大とまちの賑わいづくりのために、民間団体が主催する歴史的建造物を活用した文化活動を公募し、優れた企画に対して補助金を拠出する事業）のひとつとして、2006年11月中旬に開催された「おまけ博士とたどる 大阪モガ・モボ時代展～樟蔭学園のあゆみと大正・昭和のくらしと遊び～」がある。

1927年、現在の東大阪市菱屋西に建設された樟蔭学園のシンボル、セセッション様式の影響を受けた木造2階建ての「樟蔭学園記念館」（登録有形文化財）を会場に開催されたごく小規模な2日間だけの展覧会である。が、ユニークだったのは、その切り口である。

「大大阪」と呼ばれ輝いていた時代の大阪のモダン文化を、同地で幼少期から青年期を過ごし、後にグリコの豆玩具デザイナーとして活躍する宮本順三氏とその兄弟姉妹が残した資料及び樟蔭学園に残る資料とで構成。大阪が誇るクリエイターともいべき故・宮本順三氏の創造的感性や豆玩具づくりの哲学がどのような文化環境の中で育まれていったかを

たどることができた。文化の創造というものが、一人一人の人間の生のありように深く根ざしているものであり、一人一人の人間の生のありようは時代の風やまちの環境と不可分に結びついているものであるという、あたりまえでありながら見失いがちなまちづくりの核心を射る企画であった。

実験の蓄積を地域の血肉に

冒頭で述べたように、各主体の連携による実践の枠組みが意識的にデザインされ、新たな公共のシステムとして地域での実験が始められてきた、そんな動きを象徴するような、事例のいくつかを紹介した。

上記の事例のほかにも、関西文化の振興に寄せる思いと町衆の力を結集したまちづくりの成果として、大きな話題を呼んだ出来事の一つに、大阪市北区天神橋・大阪天満宮の敷地の一角に誕生した上方落語の定席「天満天神繁盛亭」があった。一方、規模は小さくとも重要な意味を持つ取り組みの一つとして記憶に止めておきたいものもあった。例えば、市民立の「直木三十五記念館」を会場に、60数年ぶりともいわれる復活を遂げた講談続き読み、講談師の旭堂南海氏・南湖氏が7月の1カ月を通して長編講談を語った「講談文月毎日亭」の成功である。

さらに、大阪市立大学・都市研究プラザが大阪の都心で展開する研究・実践「船場アートカフェ」や「船場建築祭」など、まちを舞台に研究者・専門家とアーティスト、学問と社会が切り結ぶ複数の社会実験が登場してきているのも大きな特徴である。

今後各地で繰り広げられていくであろう、数々の主体による実験の蓄積を経て、その経験や成果をいかに地域の血肉としていくか、地域の文化として持続的に発展し得るシステムに育てていくビジョンと戦略が必要とされてくるのだろう。

(大阪ガスエネルギー・文化研究所 客員研究員)